

第23回 近畿・北陸地方会学術集会開催にあたって

学術集会実行委員長 平河 勝美（滋賀県立大学人間看護学部）

世話人代表選挙結果

2010年2月に近畿・北陸地方会世話人代表選挙が行われました。選挙管理委員による開票の結果、阿曾洋子氏（大阪大学大学院医学研究科保健学専攻）が再選されました。

任期は、2010年4月1日から2012年3月31日です。
（投票総数：449票、投票率：31.3%）

日本看護研究学会近畿・北陸地方会会員のみなさまには、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本地方会は、ここに根を下ろして長く活動していらっしゃる方々、院内研究や修士論文を発表しようと参加していらっしゃる方々など、多様な人びとが集い、交流する場です。お互いにテーマもアプローチもさまざまですが、今年もみなさまに看護をふり返り、検討し、展望していただきたく、開催準備をしております。

このたびの学術集会では、看護研究と看護実践のいずれにおいても課題になることの多い「確実性」、「可能性」、「偶然性」などに焦点をあてております。そのねらいは、これらを鍵にして看護の本質を考えたり、現象を捉えたり、方法をイメージしたりすること、さらに、研究と実践の間を結びつけていくことです。

ますます確率化する現代社会では、医療や看護もまたその傾向を見せています。そういう看護を担う私たちにとって、数量観念を使って分析的に、またそこからひるがえって普遍的に看護を理解し実践することは重要な意義を持っています。でも看護者としてひとに出会い、ケアする中には、あるいは看護の研究を進める中には、必然的にこうなると言えることはほとんどなく、むしろちょっとした偶然が意味を持つ場合が少ないこともまた、私たちは知っています。看護のこういった意味の複雑さを前にして、私たちは発想のしかたやアプローチ法を単純化させてはならないように思われます。

みなさまと集い、具体的なエピソードなどを共有しながら一緒に考えてみたいと思います。みなさまのご参加をお待ち申し上げます。

第23回近畿・北陸地方会学術集会のご案内

日時：2010年3月14日（日）

9:30～16:00

会場：キャンパスプラザ京都

（JR京都駅前）

テーマ：看護研究、看護実践と、
“確率”“偶然”と

地方会ホームページリニューアルのお知らせ

HP企画担当 矢吹明子（京都市立看護短期大学）

2008年度から近畿・北陸地方会HPのリニューアル化に向けての準備をさせて頂き、2009年4月には公開することができました。もし、まだHPをご覧になられていない方がいらっしゃいましたら、ぜひ閲覧下さい。（http://www.jsnr.jp/kinki_hokuriku/）従来よりもさらにページ数を増やし、トップの写真をはじめ、各ページの内容も随時変更するなど、地方会の活動内容をわかりやすくお伝えしております。

また2010年度からは、長く準備中でありました「リレーブログ」ページの充実を図る予定です。臨床や教育の場で働く会員の皆様が、研究するにあたっての情報発信ならびに情報交流ができる開かれたコミュニケーションの場となることをめざし、企画担当者としてさらに努力していく所存です。

なお、皆様からのHPに対するご提案やご意見についても、お寄せいただけますよう、お待ちしております。



近畿・北陸地方会 2009年度 事業計画

1. 第23回近畿・北陸地方会学術集会：2010年3月14日（日）、於キャンパスプラザ京都
2. 2009年度総会開催：2010年3月14日（日）、於キャンパスプラザ京都
3. 第9回看護研究継続セミナー開催：2009年10月10日（土）於アオッサ、
講演：「楽しく書ける研究計画書」一ノ山隆司氏（富山福祉短期大学看護学科）
第10回看護研究継続セミナー開催：2009年11月3日（火）於キャンパスプラザ京都
講演：「生活者の視点から災害看護研究につなげる」黒田裕子氏（阪神高齢者・障害者支援ネットワーク）
4. 看護継続セミナー研究助成事業
5. ニュースレター第11号発行
6. ホームページリニューアル

●特別寄稿

2009年3月に京都橘大学で開催されました第22回近畿・北陸地方会学術集会における特別講演の内容をお伝えします。

論文を書くために必要な統計の基本 有意差を出そう

浅野弘明 (京都府立医科大学)

[1] データの種類と統計処理

データの採取・処理時には、区分を強く意識する必要があります。質的か量的かにより、処理や検定手法が異なり、結論が変わってくるからです。例えば、携帯電話に入っている知人の電話番号が、数字だからと言って平均値を計算する人はいません。逆に、精密に測定した身長データを、そのまま頻度集計しても、値が羅列されるのみで、要約にはなりません。

[2] 量的データの有効性

量的データの処理には、豊富な知識が必要になります。例えば、標準偏差に関し「何故2種類あるのか」、「標準誤差とどこが違うのか」に答えるのは、容易ではありません。また、測定が伴うため、採取も容易ではありません。扱いも採取も容易な質的データに一本化したくなりますが・・・量的データには、質的データに比べ情報量が圧倒的に多いため、より少ない標本で有意差を出せるというメリットがあります。

[3] 有意差と研究の成否

非有意を、差ナシの根拠としている事例を見かけます。大規模調査なら別ですが、通常レベルでは、絶対に許されません。50人規模の場合、2群間に30ポイント程度の差があっても、有意にはならないからです(治癒率60%と30%を、差ナシとできますか?)。

非有意は「差が有るか無いか分からない」と解釈すべきで、そこから明確な結論を導くことは困難です。「結論ナシ」=「研究成果ナシ」、途方に暮れてしまいます。「有意差をだす」これが研究の決め手と言っても過言ではありません。

[4] 層別解析

データを増やすと有意差が出やすくなりますが、安易に増やすと「シンプソンのパラドクス」(急性期でも慢性期でも薬効があるが、合併すると無効になる)に陥ってしまいます。集団別に解析する必要があり、男女別・年代別等で層別しても、十分なデータになっていないと増やした意味はありません。

[5] まとめ

有意差は、研究の成否を握る重要な鍵です。「有意差を出すための研究計画を作成する」、この視点を忘れないでください。



●会員投稿

第7回看護研究継続セミナー 「**口腔ケアによる看護成果の評価方法を学ぶ**」に参加して

地井和美 (小松市民病院)

私は、口腔ケアを、口の中をきれいにする行為ととらえ、往々にして口腔ケアのテクニックに走りがちでした。ですからセミナー講師の道重文子先生(京都橘大学)が最初に話された、口腔ケアとは、一般には“口腔衛生改善のためのケア”、広義には“口腔のもつ働きを補い支えるケア”“口腔衛生を維持し、食べる、話す、呼吸を整えるために働きかける技術である”と説明され、恥かしながら、看護の技術として重要であることを再認識しました。口腔ケアの方法をマスターする研修はいろいろありますが、口腔ケアによる看護成果の評価方法については、行ったケアをどのように評価するかという点で大変興味深かったです。自分の唾液量を実際測定してみても、こんなに少ないのか…老化?水分不足?など考えさせられました。唾液湿潤度検査紙の評価や口腔水分計での測定の体験など初めての体験ばかりでした。口腔細菌の培地も、菌の特性に応じた培地を使うなど正しい検査方法で評価しなければならないことがわかりました。今回参加したセミナーによって、日常の看護を見直す機会になりました。

●看護継続セミナー研究助成事業の公募結果

第34回日本看護研究学会プレカンファレンスセミナーの収益による研究助成の募集をしたところ、以下の方々にも助成することに決まりましたのでご報告いたします。助成額は、合計24万円です。

吉田えり氏	看護師の自己効力感とストレスコーピング・ストレス反応との関連
大浦ゆう子氏	全身麻酔下で手術を受ける患者の体圧とDTI発生要因との関連
堀口陽子氏	自己血糖測定に対する適切な援助を行うためのニーズ調査
菅野典子氏	看護技術習得に関する学生の反応分析
伊津美孝子氏	キャリア中期看護師のキャリア成熟とキャリアアンカーとの関連



第10回看護継続セミナー風景

一般社団法人 日本看護研究学会 近畿・北陸地方会事務局
〒583-8555 大阪府羽曳野市はびきの3-7-30
大阪府立大学看護学部内
電話：072-950-2111 (担当：細田泰子・和田恵美子)
会員の皆様のご意見、原稿投稿をお待ちしております。